

アスピリンの使用と大腸癌のリスク低下について

Aspirin use and reduced risk of fatal colon cancer: *Thun MJ, et al* (N Engl J Med 325: 1593-1596, 1991)

動物実験や人間での疫学的研究でアスピリンと非ステロイド系の抗炎症剤の使用で大腸癌を予防できるということが報告されている。著者らはこの仮説を prospective mortality study により調査した。

1982 年にアスピリンとアセトアミノフェンの使用頻度と期間がはっきりした大人 662,424 人(アスピリンの使用および死亡率に影響を及ぼ

す癌, 心臓病, 脳血管障害などの人を除外した)を対象に, 1988 年の大腸癌死亡率を計算することにより調査を行った。また, 大腸癌に対するほかの危険因子については多変量解析を行った。

アスピリン使用群では, 男女ともアスピリンの使用頻度が増すほど大腸癌での死亡率は低下した。相対危険率については, アスピリンの使用が 1 か月 16 回以上を少なくとも 1 年以上続けている男性は 0.60, 女性は 0.58 となっている。食事, 肥満, 家族歴などの危険因子を補正した解析でも同様の結果が得られた。

一方, アセトアミノフェン使用群では大腸癌での死亡率に変化はな

かった。

結論として, 定期的な少量のアスピリンの使用は大腸癌のリスクを低下させるとしている。

当論文は疫学的調査によるもので, 著者らはその原因としてプロstaglandin 合成阻害などのアスピリンの直接の作用か, ほかの因子による間接的な作用によるかは不明であるというコメントを述べているにすぎないが, 大腸癌においても遺伝子レベルで発癌の解明がなされている現在, アスピリンの作用機序については興味深いところである。

(愛知県がんセンター消化器内科

山近貴輔 抄)